［セッション I］

「本物の魔力―日本の寺社観光における歴史的言説の諸問題―」

中西裕二（立教大学教授）

日本人にとっても、また訪日外国人観光客にとっても、日本の寺社は観光の重要な目的地である。しかし日本の寺社をめぐる宗教体系は、明治維新直後の神仏分離政策により根本的な変化を余儀なくされた。日本の神社、とくにある程度の規模をもつ神社は、そのほとんどが中世から始まる神仏習合思想の下で発展し、その性格は神を祀る寺院といったものであった。だが明治初期の神仏分離政策と廃仏毀釈運動は、この中世以降の宗教体系を改変し、神社と寺を明確に区分することを目的とした。現在、多くの観光客を惹き付ける―それも仏教的要素を廃している―神社の形態は、実は歴史的に近代以前まで存在せず、近代になり初めて登場したものなのである。これが観光地において、日本の歴史的、伝統的文化の表象として位置づけられ、観光の対象となっている。従って、寺社に関する日本の文化観光とは、近代的なイデオロギーを再生産する装置であるとも言えるのである。

[セッション I]
「ラス・ヴェガスと世界の果て」

マイケル・ピーターソン（ウィスコンシン大学マディソン校准教授）

映画やコミックなどの大衆文化と、米国のテロ対策担当者は、ラス・ヴェガスを大惨事が起きる現場と想定してきた。一部の宗教指導者はソドムの近代都市版として、ラス・ヴェガスが破壊されることを祈り、ジェームズ・ハワード・クンストラーはラス・ヴェガスの未来像を人の住まない、寂れたゴーストタウンとして愉快そうに描いている。ラス・ヴェガスを墓所として描く人々の多くは、最近の観光局のスローガンが実現するよう、つまり、ラス・ヴェガスで起きていることがラス・ヴェガスの内部に留まるよう、望んでいるかに思える。

ラス・ヴェガスは一部の環境保護主義者や文化的ピューリタンにとっては、この世の地獄と映るようだ。一方で、世界中がマカオの後を追って、ラス・ヴェガスのシミュレーションになろうとしているようにも見える。どちらの意見も正しいのかもしれないが、ラス・ヴェガスはツーリストと住民にとっては、ただのありふれた（現実の）場所になっている。盗まれた水資源、選択的な記憶、そして未来に関する「レトロ調」の考えの上に建つありそうもない都市に。

本発表は、道徳的な姿勢に陥ることなく、ラス・ヴェガスの危険な非・持続可能性について批判を展開し、同時に、人間が無駄の中に得る喜びがラス・ヴェガス文化の一部であることを念頭に、ラス・ヴェガス文化の肯定的で審美的な理解を深めることを探る。

[セッション I]

「『農村』であることの保全とは？－グローバル化された都市的世界のなかのグリーンツーリズム」

北野収（獨協大学教授）

近年、経済生産および社会生活の営みにおける空間的側面が、地域開発や農村開発に関心を有するプランナーや社会科学者の間で認識されるようになってきた。地域づくりの実践において、プランナーとコミュニティは空間と場所の矛盾に向き合わざるを得ない。本研究は、群馬県農村部の６つの地域での住民インタビューに基づき、政府も支援したグリーン・ツーリズムや村おこしの取組みの限界を批判的に検討した。はたして、グリーン・ツーリズムは地域開発のオルタナティヴあるいはポストモダンなのだろうか。本研究で導き出された結論は、立地や資源賦存面における特権的な地域は、農村景観の維持と経済面での活性化を両立することに成功したが、批判的空間論に鑑みればこの成功を安易に一般化することはできない、ということである。これは社会的構築物としての農村景観論という有名なアーリの「まなざし」のテーゼに矛盾しない。あえて付言すれば、グローバル化が進み農村コミュニティが危機に瀕している状況において、「まなざし」を獲得できない村は、農村らしさを維持することができず、そればかりか地域コミュニティの存続すらままならない、という現実である。

［セッション I］

「先住民運動としてのエコツーリズム―タイ北部山地民カレンの戦略的な自己表象」

須永和博（獨協大学専任講師）

本発表は、タイ北部の山地少数民族カレンの人々が、エコツーリズムという観光実践に関わっていく過程で生じる、様々な文化的・社会的実践の様相について報告する。

タイ北部のカレンは、従来、中央集権的な森林政策のなかでは「無知な森林破壊者」として周辺化され、森林利用をめぐる公共空間から排除されてきたが、近年NGOなどの支援を受けながら、彼らの山川草木に関する「在地の知恵」を「環境保護を含むもの」として外部に主張することで、慣習的森林利用権を求める運動を行なっている。こうしたなかで、エコツーリズムは「在地の知恵」を外部に向けて発信する重要なアリーナとなりつつある。本発表で特に注目するのは、本来は身体化され、状況依存的な「在地の知恵」を、より普遍的な環境主義の言説に翻訳することで外部者に提示するカレンの人々の実践である。こうした節合・翻訳の実践は、森林利用をめぐるオルタナティブな公共空間を作りだすことを可能にし、他方では「カレンとは何か」を問い直す自己成型の過程ともなっている。

以上のように、本発表は、エコツーリズムが、カレンの人々にとり、ヘゲモニックな支配的な言説に抗するオルタナティブな言説を構築し、新たな自己成型を行なうアリーナとなっている点に着目し、先住民運動としてのエコツーリズムの可能性について考える。

［セッション II］

「いつも既に再び－トラウマ・ツーリズムと記憶文化の政治学」

ローリー・ベス・クラーク（ウィスコンシン大学マディソン校教授）

本発表の目的はトランスナショナルな視点からトラウマ・ツーリズムに取り組むことである。私は四大陸でおこなったフィールドワークと、文献およびネット上の資料から、残虐行為、すなわち戦争、住民虐殺、国家テロリズム、奴隷制度、アパルトヘイト、核爆弾等を記念するために登場した文化的構築物の類似点と相違点を調べている。私の研究の主な事例は、ヨーロッパ（ドイツ、ポーランド）、アフリカ（ガーナ、ルワンダ、南アフリカ）、アジア（カンボジア、日本、ベトナム）、南米（アルゼンチン、チリ）に見られる。

各々の事例は、想起されるトラウマの性質と、記憶文化に関する現地に既存の慣習の双方により、独特な変化を見せている一方で、現地の様相は世界中のどこへ行っても驚くほど類似している。記念に関する語彙が比較的限られて、つまり、同じような比喩やデザインが用いられていることは、限られた特定の建築家たちがコンペに応募したり、審査をしていることを露呈しているともいえるが、同時に学芸員、行政担当者、見物人、利害関係者たちが極めて国際化した期待を持っていることを示している。

トラウマ・ツーリズムは激しい議論を呼ぶ行為で、そこでは競合する利益（生存者と犠牲者の家族、目的を持ってやって来るツーリストと偶然居合わせたツーリスト、政府組織と非政府組織、私立財団と公益法人、保護主義者と活動家など）が確立されたパラダイムに従ったり抵抗したりしている。記憶の目的（すなわち、贖罪、和解、追悼、正義、復讐）からマーケティング、礼儀作法に至る、幅広い問題をめぐって緊張が生まれる。私は、トラウマ・ツーリズムが、どちらかと言えば社会的な権力を保持している関係者が多く集中している場所で、最も「成功」しがちな点を指摘する。

［セッション II］

「暫定空間の記憶芸術―ベルリンとボゴタに見る場所に根ざした芸術実践」

カレン・ティル（ヴァージニア工科大学准教授）

アーティストたちは長い間、市当局がマージナルと分類する景観の中で、またそうした景観を使って仕事をしてきた。マージナルな景観は、見捨てられ、廃墟と化し、価値がなく、そして国家に対する脅威とさえ思われている。しかしそうした景観の持つ外観、物語、空き地、身体など、市当局が「場違い」で撤去が必要とするものは、建物を取り壊したり、土地利用計画地図を変更しただけで簡単に消えはしない。記憶の名残としてそれらはいつまでも存続し、他の時空間的な記憶に亡霊のように取りつく。本発表は、現象学者エドワード・ケーシーが「溶けることのない記憶の遺物」と呼ぶものに取り組み、そこに生命を吹き込み、折り合いをつけようとする、公共空間を利用したアーティストたちの作品を分析する。2006 年にベルリンで開催された『ハンナー・アーレント―思考空間』展と、2009 年にコロンビアのボゴタで発表されたビアトリス・ゴンザレスとドリス・サルセドによるする、『無名のアウラ』の 2 つのアート・プロジェクトは、それぞれかつてのユダヤ人女学校と墓地を再生させ、厄介な国民的過去を、より社会的で公正な未来に結びつけている。アーティストたちはこれらの場所と関わりのある社会的儀礼に息を吹き込み、身体的記憶を通して、困難な社会問題に関する批判的な内省を促す。記憶の遺物を探査する創造的なプロジェクトは、訪問者に、予期せぬ方法で学校の空間（前者）や死者を追悼する公的な場所（後者）を巡らせることで、責任ある市民となることを求め、過去における国家の暴力の結果としての喪失、トラウマ、痛み、不正とともに生きるという困難なプロセスの認識を要請する。本発表はツーリズム、記憶、美術史の研究者たちが、これらの溶けることのない記憶の遺物が、いかに、過去、起こり得る未来、そして都市の主観性を認識し、また想像するための、多感覚的で、空間的で、儀礼的で、身体化された方法を形成し続けるかを、真剣に考える必要性を訴える。

［セッション II］

「沖縄平和修学旅行と記憶の問題」

高橋雄一郎（獨協大学教授）

毎年 40 万人前後の中高生が訪れる沖縄は、人気の修学旅行先の一つである。修学旅行先としての沖縄の魅力は、美しい自然と独特な文化に加え、国内で唯一地上戦が戦われた戦跡を巡ることで、平和について考えること、いわゆる「平和学習」の効果が期待されるからであろう。映画『GAMA-月桃の花』の公開などもあって、近年では、「ガマ体験」を修学旅行のハイライトとする学校が多い。生徒たちは「平和ガイド」の案内で壕に入り、説明を受けた後に、懐中電灯を消すように指示される。漆黒の闇が恐怖の体験として刻印され、平和への想いを新たにする、という仕組みが構築されている。しかしガマは、沖縄の人びとにとっては、爆撃からの避難場所であり、恐怖は、むしろ壕の外にあった。ガマへの入場が、視覚中心的な従来の観光から、身体性を重視したものへの転換だと主張することは出来ても、シミュレートされた体験であることは変わらない。シミュレーションを現実として教えることは、平和学習のテーマパーク化に繋がる。

［基調講演 I］

「悲惨な記憶―ツーリズムによる、悲しみ、惨事、歴史の過ち、そして悪の表象」

ディーン・マッカネル（カリフォルニア大学デーヴィス校名誉教授）

ヒロシマやアウシュビッツのような目的地の人気は、ツーリストが単に、日々の単調なルーティーンから逃れ、楽しい時間とエンターテイメントを欲しているのだと考える、今日の「ポストモダン」理論への、異議申し立てである。本発表は、「悲惨な記憶」を導き出す目的地訪問が「特殊なタイプ」のツーリズムではないと論じる。ツーリスト・アトラクションは、楽しいものであれ、恐ろしいものであれ、善と悪に対する人間の全ての可能性との一体感を呼び起こす。ディズニーランドやバリ島への旅でもそうである。ニーチェ、ヴァルター・ベンヤミン、ジャック・デリダに倣って、本発表は、各々のアトラクションが、どのようにトラウマを抑圧あるいは否定し、歴史の真実に抗っているかを調べるというアプローチをとる。トラウマをもたらす出来事が規範として記憶されるのは、元々の、そして現在も続く争いが、表象の実践として具現化される時である。悲惨な記憶の多くは、無意識のうちに記録されるか、あるいはまったく記録されることがない。このことがツーリストに、ほとんど助けなしに、歴史の真実を発見しなければならないという倫理的負担を負わせている。実際、地球上のあらゆる場所が、悲惨な記憶と楽しい記憶の双方を導き出す旅の目的地として考えられる。悲惨な記憶のあるべき場所は、最終的に、ツーリストの心（ハート）と精神（マインド）の中だけであり、現地の博物館や記念碑ではない。現地にあるこうした装置は、物語を語り継ぐという機能を果たすだけである。

［基調講演 II］

「新たな旅程－ポスト・共産主義のポーランドにおけるポーランドのユダヤ人歴史博物館の成り立ち」

バーバラ・キルシェンブラット-ギンブレット（ニューヨーク大学教授）

ホロコーストによって、ヨーロッパに数多くあった、大きく活気に満ちたユダヤ人コミュニティが壊滅して 60 年､増殖したのは記憶の所在地である｡ホロコースト関連の記念碑、史跡、博物館が、ヨーロッパのユダヤ人に起きたことに関心のある人々の旅の目的地であり続ける中、ユダヤ人博物館は、ホロコースト以前の（そしてある意味ではホロコースト以降の）ユダヤ人の歴史を伝える上で重要な役割を果たしている。近年、特に共産主義の崩壊とともに、いくつかの新しいユダヤ人博物館（中にはとても野心的なものがある）が開館、あるいは計画されており、古い博物館も改修、増築されている。それらの中には、都市景観の象徴、良心の所在地、追悼旅行や歴史遺産を訪ねる旅の目的地となっているものもある。

ユダヤ人博物館や史跡にとっての基本的ジレンマは、一方で、今日のヨーロッパにあるユダヤ人コミュニティとの関係であり、他方で、米国やイスラエルなどから訪れるユダヤ人ツーリストが抱く、ホロコーストの現場への圧倒的な関心―何千人ものユダヤ人の若者をポーランドのホロコースト跡地へと向かわせる「生者の行進」の絶大な人気とあきらかな成功について述べるだけでもわかる―との関係である。ホロコーストの記念碑や博物館が次々と建てられる中、亡くなった人々や、その人たちがどのように亡くなったかを記憶に留めるだけでなく、亡くなった人々がどのように生きたか、また、その人たちが創った文明に注目することで、ユダヤ人たちの記憶を大切にしようという努力がなされている。ベルリンのユダヤ人博物館と、2011 年にワルシャワに開館予定のポーランドのユダヤ人歴史博物館は、近年における最も野心的な例に含まれる。

ポーランドのユダヤ人の 90%がホロコーストで命を奪われ、ヨーロッパのユダヤ人の大部分がポーランドの地で死んだ。今日ポーランドを訪れるユダヤ人の旅程が、一般にショアー関連の場所に限られているのは、驚くには値しない。変化を続ける現在に至る、ポーランドにおける千年のユダヤ人文明を伝えることを使命とする「ポーランドのユダヤ人歴史博物館」は、それに代わるオルタナティヴな旅程を提示する。つまり、入館者をポーランドの近代初期における「多文化（マルチ・カルチュアル）」な遺産と言われてきたものに導くことである。ポー

ランドのユダヤ人歴史博物館は、入館者をどこへ連れて行き、またどのような出会いを生み出すのか。この博物館は今日のワルシャワ市にどのような影響を及ぼすのか。本講演は、ワルシャワのゲットー跡、ワルシャワの歴史的なユダヤ人地区に、「新しいポーランド」の入り口、フォーラム、触媒となることを目指すマルチメディアな歴史博物館を建設する挑戦を探る。